

(対象事業：3. 美術館・博物館の自主企画による諸外国との交流展覧会等の事業)

事業名：シンポジウム：野外博物館の明日を考える

「市民に親しまれる野外博物館をめざして 優れた建築文化をどのように継承し、生かしてゆくか」

事業者名： 博物館明治村

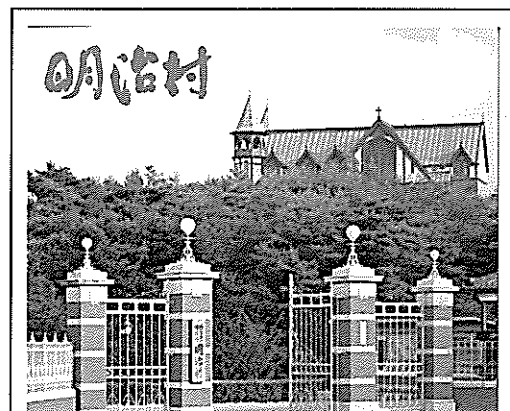
連携事業館名：なし

住所：愛知県犬山市内山 1

TEL : 0568-67-0314

FAX: 0568-67-0358

HPアドレス : <http://www.meijimura.com>



① 施設概要…

博物館明治村は、昭和40年3月に開村し、100万㎡の敷地の中に重要文化財に指定された10の建造物を含む64の歴史的建造物、車輛のほか、2件の重要文化財を含む3万点を超える歴史資料を有する博物館です。

現在は歴史的建造物内部の再現を進め、単に見学するだけでなく、復元した家具などを実際に使用することができるなど、体験的な展示手法を用い、親しみやすい博物館づくりをめざしています。

②事業の意図目的…欧米および日本の野外博物館などの設立の経緯、現状、今後野外博物館が市民に親しまれ、将来の市民生活の参考とされる存在となるための方法を問う。

③事業概要…本事業は、世界の野外博物館の嚆矢と言われるスウェーデンのスカンセン、アメリカのウィリアムズバーグなど先駆的な野外博物館や国内の野外博物館の展示建造物の保存修理、展示、普及活動などを多面的に調査し、その成果を報告するとともに、他の建造物を展示の中心に据えている施設の関係者から現状と今後に関する報告をしていただいた後、パネルディスカッションを開催。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他（ ）

作成した報告書等

ビデオ ()

冊 子 (報告書:「市民に親しまれる野外博物館をめざして」 1,000部)

その他 (

⑤参加者状況

参加者人数 約 300 人

内 訳 博物館関係者 約 30 名 建築・インテリア関係者 約 100 名

一般 約 170 名

(1) 事業の実施状況について

「博物館冬の時代」といわれる今日、博物館の存在意義が深く問われている。特に、野外博物館はその性格から、遊園地などと同一視されがちで、市民から本質的理解をなかなか得られないのが現状である。今回の事業では野外博物館が国民によりその本質について理解を得られ、さらに広く支持を得られるような博物館となるための方策を見出す契機とすることを目的とした。そのため19世紀末に開館し、現在も広く国民的支持を得ている、欧米の野外博物館を調査研究し、その事例を広く市民に紹介するとともに、博物館の目的にかなった今後のあり方を考える場とした。

海外の調査先はスウェーデンのスカンセン、アメリカのウィリアムズバーグの2箇所とし、実務担当者からのヒアリング、視察調査を行った。上記2箇所は野外博物館の嚆矢とも目され、日本の野外博物館が多かれ少なかれ目標としてきた博物館である。しかしそのありようは大きく異なる。2箇所とも現在国内の博物館が持つような入館者が減り続けるという試練をも乗り越え、現在は両者とも増加傾向にある。どこにそのカギがあるのかが今回の調査のテーマの一つともなった。日本の野外博物館がある時間・場所など特定のシチュエーションを想定し収集された建造物を整然と並べているといった印象を受けるのに比べて、スカンセン・ウィリアムズバーグともに、建物だけでなく、そこに住まった人々にかかわる歴史を伝えている点であるこれら2箇所の野外博物館は建造物を単に建築的価値だけで語るのではなく、過去の人々がかかわった生活の一つとしてとらえ、建造物内で往時の服装を着用してそこにちなんだ活動をしたり、ガイド活動をするなど、見学者が現在に生きる「自分」を見つけ直す「場」を創出している。



← アメリカ ウィリアムズバーグ

往時の衣装に身を包んだ女性が、往時の調理法についてジェスチャーたっぷりで説明してくれる。

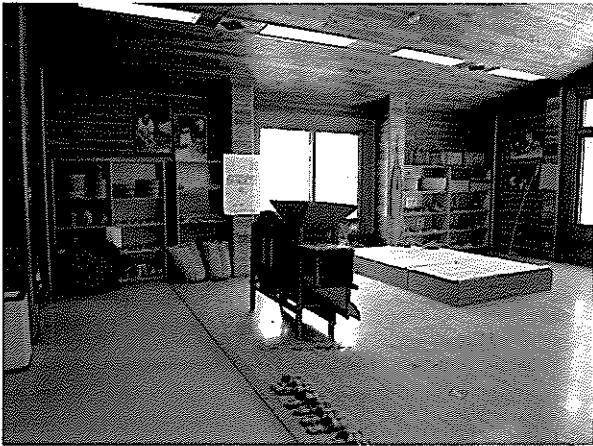
スウェーデン スカンセン →

1920年代の金物屋

昔の道具を展示するだけでなく、一部購入できるアイテムもある。



国内調査を行った館の多くが設立当初に比べ、入館者が減っている。そこでの打開策はイベント、ただひたすらイベントである。時々空気を変えるためにも、若干のイベントが必要であろうと思うが、スカンセン・ウィリアムズバーグとの大きな差異は歴史を伝えるための努力の違いであろうと感じた。スカンセン・ウィリアムズバーグでのイベントは多様性に富んでいるが、風土や歴史に培われたものを伝えられるよう、十分考えられている。残念ながら今回の視察はいずれの場所も冬季の閑散期で、繁忙期におこなわれるようなイベントやワークショップもなく、賑わいを欠いた状態だったので、一層その思いを強くした。



← 北海道・開拓の村
体験展示室

金沢 体験の森 →
織物体験室



最後に今回の事業で目標の一つとした、多様な運営母体による国内外の野外博物館の交流の拠点づくりだが、本年度が第一年目ということもあり、双方向とはいえないまでも、博物館明治村からの「野外博物館」の存在意義などを発信する基礎にはなったのではないかと思う。また、海外の野外博物館とは調査先の2箇所に限られるが、人的交流の基礎を築くことができたと思う。両博物館担当者からは、次回この企画を行う場合は是非講演やパネルディスカッションに参加したいとの暖かい言葉をいただくことができた。

（２）地域との連携について

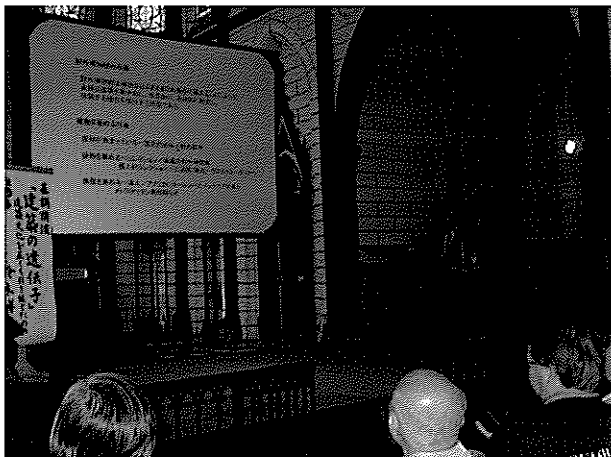
今回の事業で地域との連携は博物館・学校は皆無に近いが、建築士会などの組織と連携を取って行うことが出来ました。

（３）成果物について

成果物としては、調査の報告とシンポジウムの概要をまとめた報告書を作成いたしました。A4サイズ32ページ、1,000部制作、全国500箇所の図書館や博物館、研究者に無償でお送りいたしました。

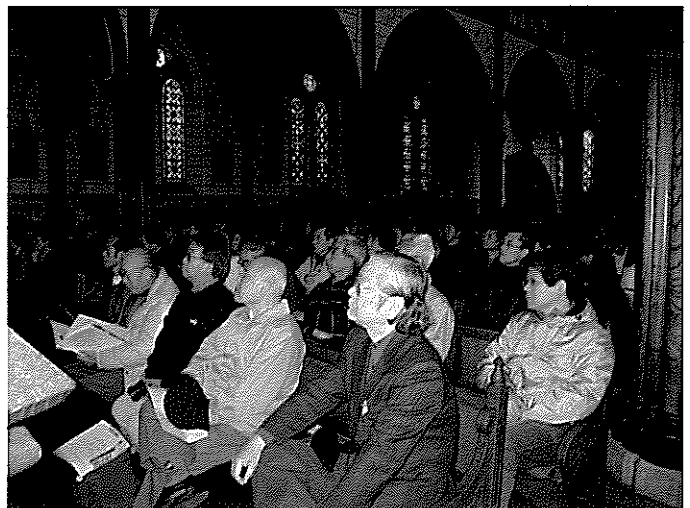
（４）参加者の反応

シンポジウムは年度末の3月26日、博物館明治村内の歴史的建造物「聖ザビエル天主堂」を会場に開催いたしました。3月末とはいえ、空調のない歴史的建造物の室内は結構寒く、参加者には入口で使い捨てカイロを配ったほどでした。しかし、約300名の参加者は東京大学大学院の鈴木教授の「野外博物館は『楽しみ』と『知的』な要素を兼ね備えており、少しヒントをもらえば一人でも楽しみを膨らませることができる」との言葉には参加者の多くが共感させられました。

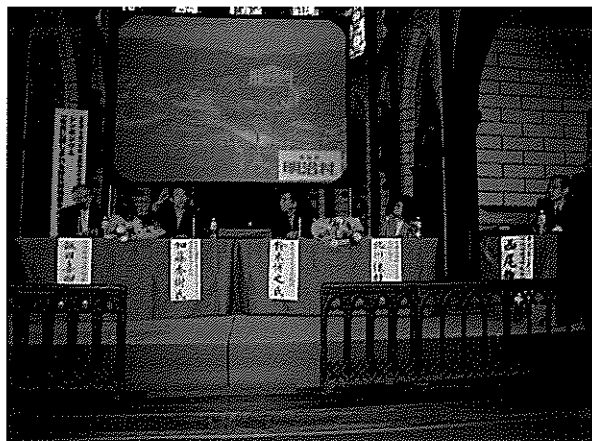


← 博物館明治村 聖ザビエル天主堂で講演する鈴木東大大学院教授

→ 冷え込みながらも、ほぼ満席状態の聖ザビエル天主堂。



四国村の加藤氏、日本郵船小樽支店の北川氏ご意見をうかがいながら、最後にパネルディスカッションから得られた「野外博物館で大事なことは、そこに存在する歴史的遺産を仲立ちにして、訪れる人と受け入れる人とのコミュニケーションを形成し、知識や楽しみを共有し、未来につなぐことである。」という言葉に対して、多くの参加者が頷くなどし、野外博物館を楽しむヒントは身近にあることを再認識されたように感じました。



← パネルディスカッションの様子

（５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

博物館明治村は本年度で開館 40 周年を迎えますが、今回のような講演会・パネルディスカッションを交えたシンポジウムを開催するのは初めてです。特に財政状況が厳しい昨今、このような多彩な調査を行い、その成果を発表するのは、館独自の活動としては行いにくく、今回の助成は過去の「明治のくらし よろず体験」（平成 14 年度）、「知ろう 体験しよう 明治の大発明『ガラ紡』」（平成 16 年度）など体験的展示手法とは若干異なり、博物館の存在の根幹を再確認する場となりました。近年博物館明治村は楽しめる「博物館」としての評価もいただくようになり、野外博物館としてのその本質を一般の方々に理解していただく絶好の機会ともなりました。また、私どものこのような活動が近隣の博物館美術館のみならず、全国各地の野外博物館への大きな刺激ともなりえたのでは、と自負しています。